THE RAY
*009>2010.10
TAKE FREE!
Superchunk
SUMMER SONIC 2010 OVAL TERA MELOS
BING JI LING YAMON YAMON SHARON VAN ETTEN

Deerhunter
FUJI ROCK FESTIVAL '10
L'ALTRA
BLONDE REDHEAD
ANTONY & THE JOHNSONS
THE RAY 009
TAKE FREE!
2010.10

# CONTENTS



*This is the happy ending of the summer. Enjoy!*

# THE RAY

SUPERCHUNK
new disc
『MAJESTY SHREDDING』
［PCD-93360 / P-VINE RECORDS］
2010.9.2 out
ON THE COVER
INTERVIEW & TEXT BY SO KATAOKA, TRANSLATION BY MIHO HARAGUCHI

2009年12月10日、Shibuya O-nestで見たスーパーチャンクのライヴを、忘れることはないだろう。あの場に立ち会うことのできた幸運なオーディエンスを改めて虜にした、インディ・ロックの理想の結晶。音楽にまつわるすべてが受難の時代である今だからこそ、彼らが再び走り始めた意味は大きいと思う。だって、このバンドが音楽好きに与えられる勇気は並じゃないから。そう、自分達だけが頑張るのではなく、ぼく達の前でも、後ろでもなく、いつも隣りを、いっしょになって全力で走ってくれるバンド —— それがスーパーチャンク。10年の時を経て、まさに再スタートを切るに相応しい新作『MAJESTY SHREDDING』とともに帰ってきたスーパーチャンクに、両手いっぱいの花束を捧げたいと思う。

—— 今日はインタヴューありがとうございます。早速ですが、まずは昨年末の来日公演の感想から聞かせてください。もう半年以上経ちますが、今でも鮮明に思い出せるほど素晴らしいライヴでした！

ローラ・バランス（B）：ありがとう。私達もめちゃくちゃ楽しんだわ！　まるで昨日のことのようでもあれば、2年前だったような気もする、それくらいいろいろあったの。ライヴは楽しかったし、お客さんも最高だった。京都で初めてやれたのも良かったわね。アメリカとは本当に別世界だから、日本の文化に触れられて有意義だったわ。

マック・マッコーハン（Vo. & G）：あれって12月だったよね？　最高の時間を過ごせたよ。久しぶりだったしね。最初はちょっとナーバスだったけど、そんなのはどうでもよくなるくらい楽しかった。日本のオーディエンスは相変わらず優しかったしね。ただ、連続で5回のショウをやるのは久しぶりだったから最終日はかなり筋肉痛で……もう年だからね（笑）。

—— また、昨年はマージ・レコーズが20周年という節目の年でもありました。アニヴァーサル・イヤーを祝う企画（※記念コンピレーション『SCORE!』のリリースや、フェス“XX MERGE”の開催、Triangle Youth Ballet とのコラボレーション“Merge with Motion”など）が目白押しでしたが、振り返ってどんな1年でしたか？

ローラ：もう大忙し！　まさにクレイジーだったわ！　記念イベントやリリースにはとことん労力と時間を費やしたの。5年置きにしかこういう記念行事をやらないからまだいいけど、それでもちょっと多いくらいね（笑）。

マック：フェスはチャペル・ヒルでやったんだ。5日間で、いろんなバンドが演奏しまくった。コンピの売り上げも好調だったよ。残ってるのも、あと100コピーくらいじゃないかな？　去年はすごく良い年で、心の底から満たされてたよ。コンピも大成功だったし、フェスも最高に盛り上がったしね。フェスはちょっとサマーキャンプみたいだったんだ。普段遠くに住んでいてなかなか顔を合わせない人達が1つの場所に集まって、いっしょに何かを楽しんでね。あんなに忙しい年になるとは、実は思ってもみなかったんだ。年の始まりはあまり予定がなかったんだけど、他のリリースに加えて、“20周年”がぼく達を忙しくさせたんだ。

—— そして2010年も年明けから話題作のリリースが続いていますね。また、秋からはスーパーチャンクのツアーも始まります。最近はどんな風に過ごしていますか？

マック：9月にぼく達のレコードが出て、その直後からツアーを始めるんだ。夏もいくつかショウをやったよ。ほとんどがフェス・タイプだったけどね。楽しかったよ。今は、新しいアルバムの曲を特訓しているところ。何曲かはすでにマスターしたんだけど、ちゃんと全部をうまくプレイできるようにならないとね。昔の曲はもう何年もプレイしているから平気だけど、新しいのはまだまだなんだ（笑）。

—— そういえば先日、The A.V. Clubの“UNDERCOVER”に出演してザ・キュアーの「IN BETWEEN DAYS」をカヴァーしていましたね。ちょっと意外な気もしましたが、この曲を選んだのはなぜですか？

マック：プロジェクトは、まず曲のリストから始まったんだ。そのリストには8曲が載ってたんだけど、その中でも「IN BETWEEN DAYS」がメンバーの全員一致で決まってね。ジョン（・ウースター ／Dr.）はNYだから練習の時間があまりなかったけど、かなりの超特急で習得したよ。それな事情にもちょうど合う曲だったんだ（笑）。もちろん、『THE HEAD ON THE DOOR』は最高のアルバムだと思うし、今でもよく聴いているアルバムの1つだからね。それも理由だよ。

—— “UNDERCOVER”にはザ・クリアンテルやワイ・オークなどマージ・レコーズからの出演も多いですが、これは偶然？

マック：どっちもすごく良いカヴァーを演奏してたね。ザ・クリアンテルはM.I.A.の「PAPER PLANE」を演って、ワイ・オークは、ちょっとどの曲かは忘れてしまったけど、キンクスの曲（※「STRANGERS」）をカヴァーしたんだ。あれは楽しかった！　時間があったらぜひチェックしてほしいな！　マージからの出演が多いのは偶然だろうね。あのプログラムは視聴者がお気に入りのインディ・バンドを選んで、それで出演が決まるから、その選ぶ人達の中にたまたまぼくらのファンが多かったんだろうね。

—— 再来週は逆にスーパーチャンクの「DETROIT HAS A SKYLINE」を誰かがカヴァーするようですが、誰がやるかを本人特権でもう知ってたりします？（笑）

マック：知らないんだよ。彼らは絶対秘密主義だからね（笑）。絶対に何も教えてくれないんだ。見当も付かないよ（※気になる人は、The A.V. Clubのウェブサイトに！）。

—— ではここからはニュー・アルバム『MAJESTY SHREDDING』について聞かせてください。首を長くして待っていた多くのファンが歓喜する作品だと思います。それにしても9年振りとは……長かったです。

マック：ああ、9年って長いよね（笑）。でも良い気分だよ。

ローラ：私もすごくうれしいし、とてもエキサイティングしてるわ。ここ最近の作品の中で1番楽しみかもしれない。バンド活動から少し離れてたというのもあるけど、とにかくロックしたアルバムだから！

マック：新しいレコードを作りたかった理由の1つは、ライヴで新しい曲を演奏できるようにしたかったんだ。ぼく達は今でもショウで演奏するのが大好きだから、何かそれ用に新しい要素がほしかった。オーディエンスにもう何百回も耳にした曲ばかりを聴かせ続けるわけにはいかないからね。だから、このレコードのアイデアの1つは、「ライヴで楽しめること」だったんだけど、それは達成できたと思っているよ。あと、1曲1曲を“グレート・ソング”にするという目標もね。繋ぎだけの曲とかはなくて、最初から最後まで最高の曲に仕上がった。9年も待たせてるから、期待が大きいこともわかっていたしね。そうじゃないと、「こんなアルバムを作るのに9年もかかったのか!?」って思われるだろ？（笑）それらすべてが達成できたから、100％満足しているよ。

—— 昨年のインタヴューでニュー・アルバムのリリースは2010年秋くらいと予告していましたが、その通りになってうれしく思います。メンバーが集まれる時に集まって2、3曲ずつ完成させていくと言ってましたが、レコーディングはスムーズに進んだということでしょうか？

マック：うん、今回は流れがすごく自然だったからね。それぞれのセッションで3、4曲ずつ進めて、1年で約4回セッションをやったんだ。それぞれのセッションも、大抵は週末だけみたいな短いものだったよ。レコードを完成させるのに1年かかったけど、実際にレコード作りをやったのは1年のうちでこの週末とあの週末って感じだね。あとはぼくがそのトラックを家に持ち帰って1人で作業したりとか。それから音源をスコット・ソルターに送って、彼が手を加える。そんな流れだったよ。自分達にとってはいつもとは違うプロセスだった。昔はスタジオに入って、デモがセットされるまで1、2週間そこに籠るって感じだったからね。でも今回はこのやり方で良かったと思う。ライヴ感がキープできたし、セッションとセッションの間に時間があったから、前回のセッションでの音源を改めて見直すこともできた。結果的に、すごく良いやり方だったと思っているよ。

—— レコーディングをバンド初期の手法、あなたのデモをメンバー全員で発展させていく形にしたのはなぜですか？

マック：今回は特にそのやり方しかなかったんだ。ジョンはNYにいたし、全員がそれぞれ忙しかったから、前のアルバムのようにみんなで集まって曲を書いて、1週間練習しまくるってことは不可能だったんだ。だから、ぼくがデモを送って、みんながそれを聴いて、集まった時に即座にマスターするっていうスタイルに戻す必要があった。でも、うまくいったと思うよ。

—— なるほど。では、今回のレコーディングで特に難しかった点はどこでしたか？

マック：ぼくにとってはヴォーカルかな？　でも、それよりもやっぱり1番は曲を録った後だね。いくつかはシンプルな曲だから簡単だったけど、複雑な曲も結構あって、「ちゃんと正しいテイクが録れたのか？」とか考え込んでしまってね。スタジオでオーバー・ダブする時も大変だったんだ。でも、その点ではスコット・ソルターに助けられたよ。彼はぼく達にやり直しをさせるのがうまくてね（笑）。ぼくだけだと、「もっとギターが必要かな？」とか、「もう少しキーボード・メロディを加えるべきかな？」、「もしくはこのまま手を加えない方がベストか？」とか、とにかく考えがすぐにはまとまらないんだ。だからやっぱり、曲が完成した後が1番大変だったね。でも、最終的には何がベストかちゃんと突き止めることができたと思っているよ。

—— 先ほど「ライヴで楽しめるもの」が今作のアイデアの1つだとおっしゃってましたが、その言葉通り『MAJESTY SHREDDING』は、後期の作品よりもシンプルなバンド・サウンドに回帰した、ライヴ感を生かした作品のように感じます。そうした理由も教えてください。

マック：やっぱり、過去の2、3枚のアルバムからはちょっと離れたいって気持ちがあったからかな？　前のレコードももちろん好きだけど、あのサウンドはもっとコントロールされてると言うか……。長い間ライヴでずっと演奏してきたから、その分レコーディングでは手を加えすぎてしまったんだ（苦笑）。だから、もっと自然に任せたサウンドを作ってみたかったんだよ。よりライヴなサウンドになっている理由はそこだと思うね。

ローラ：私も同意見よ。シンプルで直球。アルバム制作から離れている間、ライヴは何回かやったけど、その時によりロックな曲を選んでやってることに気付いたの。それが楽しいし、得意だということもね。原点と言うか、得意分野に戻った感じね。

マック：あとは、さっきも言ったように、ライヴで楽しく演

スーパーチャンクのニュー・アルバムが、まさか9年振りになるとはね。
長いブレイクを決めた理由の1つは、同じことを繰り返さないためだった。
新たな挑戦で、斬新なテイストの作品を作れて、今は最高の気分だよ。
—— マック・マッコーハン

Welcome Back,

奏できることが目的だったからね。ただプラグを挿して、ギターをプレイすることから初めて、あとはちょっと手を加えるだけっていう。そういう感じで作った曲ばかりなんだよ。それで今回のようなサウンドができ上がったんだ。ある意味、以前よりもっとパンク・ロックだと思う。何回か聴くうちに、その背景に１回目では感じ取ることのできなかった他の何かが見えてくるんだ。『NO POCKY FOR KITTY』とかとの違いはそこだね。あっちはもっと意識的にライヴ・サウンドを捉えようとしていたけど、今回はもっと自然なんだ。

―― では各曲ごとについても聞かせてください。１曲目の「DIGGING FOR SOMETHING」は「HYPER ENOUGH」を彷彿させる最高のオープニング・ナンバーですね。また、バック・ヴォーカルでザ・マウンテン・ゴーツのジョン・ダーニエルが参加していますが、その経緯を教えてください。

マック：ぼく達がレコーディングをしている時、ちょうどジョンがマージのオフィスの近所に住んでたんだ。この曲にバック・ヴォーカルが必要だってことは最初からわかってて、普段はぼくが自分で歌うんだけど、今回はジョンが近くにいたから思い切って頼んでみたんだよ。そしたらやってくれてね（笑）。彼の声はすごく特徴的だし、他の人の声が入るのもクールだと思ってね。で、実際にやってみたら最高の出来になったんだ！

―― 今作のプロデュースはスコット・ソルターが務めていますが、マウンテン・ゴーツの諸作で著名です。ジョンからの推薦もあったのかなと思ったりしたのですが？

マック：スコットは何年か前、ぼくがポータスタティックのレコードをやってほしかった人物なんだ。でも、スケジュールの都合で実現できなくてね。それが記憶に残ってたんだ。で、スーパーチャンクのドラマーの方のジョンが（笑）、「マウンテン・ゴーツのレコードでスコットと仕事する時はいつだって最高だから、ぼく達も彼といっしょにやるべきだ」と言ってきてね。それで彼に頼むことになったんだ。

―― アルバム前半は疾走感溢れる曲が続きますが、６曲目の「FRACTURES IN PLASTER」での漂うようなギターのフレーズとストリングスの絡みがとても印象的です。この曲にストリングスを入れようと思ったのはなぜですか？

マック：前の作品のいくつかでもストリングスを取り入れてるけど、今回のアルバムでは前回ほど多くのストリングスやキーボードは入れたくなかったんだ。正直、早いテンポの曲にそういうサウンドをうまく組み込むのは難しいからね。でも、この曲はアルバムの中でも１番のスロー・ソングで、曲にスペースがあった。なんていうか、サイケデリックな感じのサウンドでもあるしね。ちょうどぼくが入れてみたいと思うメロディもあったから、ヴィオラ奏者のクリスチャンに頼んで演奏してもらったんだよ。

―― 先行シングルとしてもリリースされた７曲目の「LEARNED TO SURF」での、“I stopped to sinking and learned to surf. I stopped to swimming and learnd to surf.”という歌詞は、スーパーチャンク流の復活宣言のようにも取れましたが、いかがでしょうか？（笑）

マック：ハハハ！　おもしろいことを言うね、そんなことは全然考えてなかったよ（笑）。この曲はぼくが実際にサーフィンを習ってる時に書いた曲なんだ。まぁ内容自体はサーフィンの曲と言うより、日常生活のシチュエーションをどう生き抜いていくかっていう内容だけどね。日々フラストレーションが溜まったり、自分がやりたいことを妨げるようなことが起こるけど、それをどう乗り越えていくか。それがこの曲の内容なんだ。

―― ラストの「EVERYTHING AT ONCE」は今作を集約するような見事なエンディングですね。また、アルバム・ジャケットに描かれたモノトーンの海ともリンクするように感じました。このジャケットはどういうイメージを表したものですか？

マック：うん、だからこそこの曲を最後に持ってきたんだ。すべての曲ではないけど、アルバムに収録されている曲のいくつかは音楽について歌っているんだ。で、この曲も音楽についての曲なんだよ。ロック･ミュージックについてだったり、音楽から何を感じるかとか、人生で音楽がどんな役目を果たしているかとかね。それがこの曲の内容の１つ。で、もう１つは、自分達の曲の歌詞にあまり特別な意味がないことを自虐しているんだ（笑）。なんか、ぼく達の歌詞って筋が通ってないって言うか、方向が定まってないんだよ。それと同じで、このジャケットも特に意味はなくてね（笑）。ギター・アンプの後ろのチューブをぼくがたまたま描いて、それをデザイナーのマージェンに渡したら、「背景に何か写真みたいなものを持ってきたら？」って彼女が言ってね。それでいくつか試してみて、ピラミッドとかエッフェル塔とかを組み合わせてみたんだけど、なんかしっくりこなかったんだ。それで、ノース・キャロライナのビーチの写真で良いものを見つけたから、それを使うことにした。理由は、ただクールでミステリアスに見えたから、それだけさ。裏に隠された意味とかは全然ないんだよ（笑）。

―― （笑）では、“Majesty Shredding”というアルバム・タイトルの由来を教えてください。

マック：これも深い意味はなく、ただの笑い話なんだ（笑）。スコット・ソルターがスタジオにいた時にできたジョークなんだけど、「自分達がギターでどんな間違いをしても、スコットがコンピューターで修正してくれる」みたいなフレーズをみんなが言うようになってね。で、実際はそんな名前のものは存在しないんだけど、彼が直す時に使っているソフトをぼく達が勝手に“Majesty Shredding Plug-in”って名付けて笑ってたんだ（笑）。例えば、曲をプレイバックしている時に、ギターのミスを見つけたりするだろ？　そういう時に、「おいスコット、こんなの君の“Majesty Shredding Plug-in”ですぐに直せるだろ？」なんて風にね。タイトルを決める時に、ただ歌詞の一部から取るなんてことはしたくなかったからね。あとは、誰かがギター・ソロを弾いている時に、“He's shredding（何かを細かく刻むような動き）”っていう表現の仕方があるんだけど、自分達は実際そんなに“shredding”する方じゃないから、それもおもしろいと思ってね。それに、もし君が“Majesty Shredding”の意味を知らなかったら、何か意味ありげな言葉のように聞こえるだろ？　だからっていうのもあるよ（笑）。

―― （笑）よくわかりました。では、８年振りのスーパーチャンクとしてのレコーディングで改めて感じた４人ならではの感触、新たな発見のようなものもあれば教えてください。

マック：長く間を明けての久しぶりのレコーディングだったから、前回レコードを作った時よりもさらに新鮮さを感じたよ。完成したレコードを聴くのってすごく興奮するんだ。またもう１枚作れる気分になる！　発見は、そうだなぁ……自分達がまだまだ違ったテイストのレコードを作れることがわかったことかな？　長いブレイクを決めた理由の１つが、「同じことを同じやり方でやり続けたくない」だったんだ。新しいレコードを作るまでに時間が掛かったのは、そこから抜け出すべく新しいやり方を見つける必要があったからで、今回はそのやり方を発見して、そして良い作品が作れたと思うよ。

ローラ：私はもっと単純に、みんなが笑わせてくれることね。だからすごく楽しかったし、懐かしかった。でもまた同じ車に１週間ずっといっしょに乗ることになったら、話は変わるかもしれないけど（笑）。

―― では少し話題を変えて、9月16日にはNasher Museum of Art at Duke Universityでのリリース・ショウも決まっていますね。この場所を選んだ経緯を教えてください。

マック：リリース・ショウとして何か変わったこと、違うことをやりたかったんだ。ロック・クラブにあまり行かない人達にも来てほしいしね。家族とか、クラブで夜更かししたくない人とか、あまりそういう場所が好きじゃない人とか。だから、ミュージアムでやればいろんな人が来れると思ったんだ。すごく綺麗な場所で、あんな美しいセッティングでショウができるのはうれしいよ。今回の作品と同じで、何か違うやり方を試したかったんだ。

―― 『MAJESTY SHREDDING』はスーパーチャンクの“これから”を予感させる作品ですが、今後の活動予定を教えてください。メンバー個々に活動を抱えていますが、どういうバランスでスーパーチャンクをやっていく予定ですか？

マック：そうだなぁ。今のところ決まっている予定は、レコードをリリースして、秋からツアーを開始するってことだけ。その後はまだわからないな。様子見だね。みんな家族もいるし、全員の時間が合う時がいつになるかわからないんだ。それぞれが自分のプロジェクトで忙しいからね。

―― スーパーチャンクのことを知らない人が『MAJESTY SHREDDING』を聴いて、メンバーの年齢を当てることは至難の技だと思います。これは昨年のライヴを見ていても感じたことですが、なぜあなた達はこんなにも瑞々しさをキープしたままでいられるのでしょうか？

ローラ：とにかくアクティヴでいて、常に何かにチャレンジしているからだと思う。初めてスーパーチャンクのアルバムを手に入れた人でも気に入ってくれたらうれしいわ。新しいバンドだと思ってくれたらなおさらね。

―― では最後の質問です。マージ・レコーズが1992年にリリースした初のフルレングス・アルバム『TOSSING SEEDS』から20年近く経過しました。そしてその種はかけがえのない大きな果実を実らせたと思います。マージ・レコーズを設立した当時、20年後の今の姿を想像できましたか？

マック：想像できなかったね。でもだからこそ、マージは今でも存在してるんだと思う。20年後どうなってるかとか、そういうことはあまり考えないようにしてたんだ。ただ、音楽をやっていたいなとだけ、漠然と考えていたよ。仕事になるなんて思いもしなかったね。

ローラ：そうね、まさかこんな長い間やってるとは夢にも思わなかった。数年で終わると思っていたから。こんなにも多くの素晴らしいお客さんの前で演奏できたこと、こんなにも多くの素晴らしいミュージシャン達といっしょに仕事ができたこと、マージに携わってくれた多くの人達に出会えたこと、そのすべてを光栄に思うわ。

―― もし 20 年前の自分に何か一声掛けることができるとしたなら、何と声を掛けたいですか？

マック：うーん、きっと何も言わないな。当時は当時で、何かに縛られることもなくうまくやっていたから。何かを起こそうなんて考えたりはせず、やるべきこと、やりたいことを自然にまかせてやっていく。それでうまくいってたからね。そんなやり方でベストに機能してたと思うから、何も言う必要はないと思うんだ。

ローラ：私は「This Is It！（これがあなたの運命よ）　全部をメモして、写真もたくさん撮るのよ！」って言いたいわ（笑）。

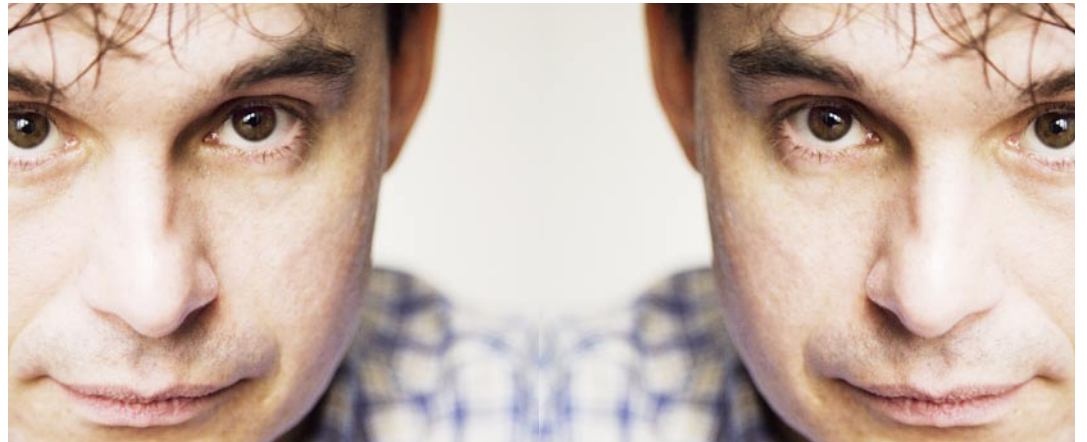
スーパーチャンクも、マージ・レコーズも、私の運命そのものね。
20年もの長い間続けることができるなんて、夢にも思わなかったわ。
素晴らしいオーディエンス、ミュージシャン、スタッフ、すべてが私の誇りよ。
―― ローラ・バランス

Superchunk!

# ANTONY AND THE JOHNSONS BEADILY #01

今現在、その動向を世界中から注視されている最重要アーティストの１人、アントニー・ヘガティ率いるアントニー・アンド・ザ・ジョンソンズから、早くも新作完成の報が届いたことに驚きを禁じ得ない。前作『THE CRYING LIGHT』は2009年１月の発表なので、一般的な尺度では決して短い空白期間とは言えないだろう。が、自分は彼に変わる表現を他に知らないし、今でも『THE CRYING LIGHT』を頻繁に聴き、その都度震えるような戦慄を覚えている身としては、まだ彼らの新たな作品を受け入れる余地がない。ある種の戸惑いが先に立つ。これほどまでに聴いている前作でさえ、まだ咀嚼できていないというのに——。それほどまでに深い思慮と陰影が、アントニー・ハガティの創出する世界には宿っていると思う。そして、『SWANLIGHTS』。通算４作目となる本作に収められた楽曲の多くは、前作と同時期に書かれたものだという。また、ビョークを筆頭に過去の作品同様、稀有な才能が集う。そして、新たな扉は開かれた。不揃いなリズムが醸す焦燥感とでも言おうか、情緒を揺るがす悲劇性を纏った音世界に目眩く。前作を陽だとすると、今作は陰か。否、その実像は、作を重ねるごとにむしろ遠のくかのようだ。 » 片岡　壮

# BEADILY #02 OVAL

かつてレコードのスクラッチ音がDJに革命を起こしたように、既成のCDのスキップ音に目をつけ、ランダムに現れるテクノロジーの軋みを利用した〈脱構築音楽〉で音響／エレクトロニカ以降の決定的な手法を〈構築〉したオヴァルことマーカス・ポップ。彼が提示した非音楽的な作業過程〈オヴァル・プロセス〉は、断然新しく、複雑なようでいて、実に明解。オヴァル不在のこの10年の電子音楽は、良くも悪くもそんなプロセスをなぞらえた（もしくは無意識に採り入れた）作品がほとんどだったような……気が。そんな中、10年振りに発表された彼の新作『O』は、自身の分析時代からの開放を感じさせる清々しいポップ感に溢れ、とにかくびっくり！　はっきりとわかるプリペアド・ギターや生ドラムの音（なんと本人による演奏）、そして携帯の着信音のように日常的な電子音など、かつて歩み寄ることのなかった音楽的な意識があちこち姿を見せる。また、２CDで70曲（日本盤は76曲入り）収録というヴァリエーションの豊富さも特筆で、例の美しい違和感に加え、〈音楽性〉と〈身体性〉も獲得した彼の新たな創造力の爆発を感じずにはいられない。今、声を大にして言いたい——「もはや誰もオヴァルになれない！」 » 久保正樹

# SHARON VAN ETTEN BEADILY #03

写真から受ける印象は中性的な顔立ちの平凡な女性といったところ。だが、彼女こそ現在ブルックリンを中心に熱い注目を集めるSSW、シャロン・ヴァン・エッテンだ。その理由は「LOVE MORE」を聴けば明白。幽玄のギターとハーモニウム、ゆったりと鼓動するドラムでシンプルかつ優雅なメロディを描き、そして何より柔らかだが存在感のある歌声は１度聴いたら忘れられない印象を残す。そのビタースウィートな白昼夢のゆらめきは魅力的で、すでにザ・ナショナルやボン・イヴェールがカヴァーしたほど。アコースティック主体のほぼ１人で行なったホーム・レコーディングによる１stアルバム『BECAUSE I WAS IN LOVE』を昨年発表。同作はごく簡素なプロダクションながら、ブリティッシュ・フォークの影響を感じさせる佳作だった。それから１年、早くも２ndアルバム『EPIC』が届いた。前述の「LOVE MORE」を収録、今回は初めてスタジオでの作業を行い、バック・バンドとともに作られている。ダイナミクスを増したサウンドはドラマティックに、クリアになったヴォーカルはより深みを増した。ただただ美しく、濃密な感情が渦を巻く今作はUSフォークの金字塔となるだろう。次世代のキャット・パワーは彼女で間違いない。 » 角田仁志

── ラルトラとしては５年振りとなるニュー・アルバム『TELEPATHIC』の完成、心からうれしく思います。リリースを目前に控え、まずは今の心境から聞かせてください。
ジョセフ・デスラー・コスタ（以下ジョー／Vo. & G）：完成してとてもうれしく思っているよ。作業もとても楽しかったしね。
リンゼイ・アンダーソン（Vo. & Key.）：私達もとってもエキサイティングしてるの。だって、数年前はラルトラに未来があるのかどうかさえわからなかったんだから。
── 『TELEPATHIC』を聴いてまず思い浮かんだのが、“以心伝心”、“あうんの呼吸”といった言葉です。長い空白期間を微塵も感じさせませんが、今作での２人のコラボレーションはどのように行われたのですか？
ジョー：リンゼイとぼくには特別なケミストリーがあるんだ。共同作業が功を奏してるとまでは言わないけど、いっしょにうまくやれたと思う。ぼく達は合うんだ。お互いをよく知っているしね。ぼく達のコラボレーションはブルー・ジーンズのようなものさ。時々ちょっと汚かったり、キツすぎたりもするけど、でもいつだって履くのに最適のチョイスだね。
リンゼイ：そうね、とてもうまくいったと思う。多分最初のセルフ・タイトルのEP以来、１番うまくいったかもしれない。
── ぼくも真の最高傑作だと思います。また、その過程で改めて感じた相手の特性、新たに発見した魅力などあれば教えてください。
リンゼイ：今回、私は共同作業に感謝するってことを学んだ気がするわ。昔は常に抵抗していて、１人でやりたいって思っていたけど、今は誰かといっしょにやることの大きな恩恵を実感してる。それに、ジョーはいつだって魅力的だって気付いたわ。彼は私をいつも笑わせてくれるの。
ジョー：ぼくもソロをやって目が覚めたよ。パートナーといっしょにやることがどれだけ楽しいかってことにね。１人で航海なんてしたくない。見るものを共有したり、違う視点を持ったりする方がよっぽど良いね。リンゼイは魅力的なパートナーだよ。何より声がスウィートなんだ。
── そもそも『DIFFERENT DAYS』リリース後、まさにこれからという時に活動を休止してしまった理由は何だったのでしょうか？　「DIFFERENT DAYS」には“Move us in different ways, so different days”というその後を暗示するような一節もありますが、当時バンドを休止する予兆はあったのでしょうか？
リンゼイ：そう、「DIFFERENT DAYS」のあの歌詞は、ジョーと私がもういっしょにやれなくなって、隔たりができ始めているという事実を歌ったものよ。
ジョー：そうだね、あれは奇妙な時間だったよ。いよいよ成功に向けて動き始めていたのに……結局すべてはぼく達の周りから崩れ落ちてしまった。ぼく達の個人的な生活が障害になったんだ。継続が不可能になってしまったんだよ。
リンゼイ：感情的な問題があったのね。それに、ツアーの運営に関する問題もあったし。あの時点でのベストな手段が休止だったの。もしあのまま続けていたら、とても不幸せで不健康な結末を迎えたかもしれない。物事はすべて不変ではないということは、愛すべき認識だったわ。
── その後あなた達はソロ活動に入りますが、2008年にラルトラを再始動するきっかけとなった出来事などあれば教えてください。
ジョー：ぼく達は個人的な問題の大部分を解決することができたんだ。また友達に戻れたんだよ。２人とも曲は書き続けていたしね。もうソロ・アルバムは作りたくなかった。無意識に、ぼくの曲でリンゼイが演奏するパートを考えたりもしてたよ。新しいアルバムを作るのが当然の帰結に思えたんだ。
リンゼイ：ジョーと私はしばらく離れて、それぞれソロ活動をして、そして気付いたの。お互いの視点と強さを欲していることに。私の人生のここ10年間はラルトラに捧げてきて、１人でやることによって本質的にはその軌跡を見直そうとしているんだってことに気付いたの。不毛よね。1、２年、１人でやれたことはうれしく思うわ。自分の強さや弱さを認識することができたし、私がここ何年も探し求めてきた声

**00年代前半、スロウコア／サッドコア・シーンの新たな旗手としてシカゴに咲いた一輪の薔薇、ラルトラ。**
**３枚の秀作を残し、惜しまれつつも2005年に活動を休止、ソロへと袂を分かったジョーとリンゼイの２人が、**
**これほどまでに感動的な邂逅と再生を果たすとは、誰が想像し得ただろうか？**
**“Telepathic（心と心で通じる、精神感応的な）”と題された新章で描かれるのは、とある男女の、**
**美しくも悲しい物語。声にならない声が交錯するその先にこそ、美が宿る。その瞬間を捉えた傑作の誕生だ。**

# L'ALTRA BEADILY #04

INTERVIEW & TEXT BY SO KATAOKA, TRANSLATION BY MINORU HATAKEYAMA

は、ラルトラでしか見出せないんだってことに気付けたから。アーティストとして、より自覚的になれたのよ。
── 2008年にはラルトラとして初の来日ツアーも行われています。O-nestでのステージを見ましたが、あなた達のライヴを見て泣いている人が少なからずいたのが印象的でした。あの日のことは憶えていますか？
ジョー：もちろん憶えているよ。日本に関するあらゆることが忘れられないくらいさ。おかしいと思うかもしれないけど、時々日本が恋しくなるんだ……。
リンゼイ：私もあの日のショウは、ずっと憶えているでしょうね。とても特別なショウだったし、私達は夢中になってやったわ。みんな、とても真剣に見てくれてうれしかった。曲を知ってくれてる人も多かったし。終わった後、すごく良い気分になったし、オーディエンスも同じように感じてくれているって聞いてうれしかった。こういうことこそ、私がライヴで求めているつながりなのよ。
── では話を戻して、『TELEPATHIC』のレコーディングはシカゴで行われたそうですね。マーク・ヘルナーやジョシュア・ユースティスなどお馴染みの顔ぶれに加え、チャールズ・ラムバック、ジョシュ・エイブラムス、ダレン・ガーベイなどが参加したそうですが、レコーディングはどのように進みましたか？
ジョー：最高だったよ。寒いシカゴの冬に、古くて薄暗い銀行の金庫室の中にあるスタジオに籠ってね。ぼく達はとてもラッキーなんだ。いっしょにやってくれる素晴らしいミュージシャンがたくさんいるからね。ぼく達の曲がうまくいったのはすべて彼らのおかげだ。彼らが肉で、リンゼイとぼくが骨だね。
リンゼイ：レコーディングは最高だったわ。みんな、とても楽しそうで。いま私達は年を重ねてそれぞれ忙しくなってしまったから、レコーディングは集まるための良い口実なのよ（笑）。マークやジョシュとはもうずいぶん会ってなかったし、彼らと音楽をやるのは、いっしょに暮らしてほとんど毎日朝早くから夜までジャムってた昔みたいだった。たくさんワインを飲んだり、のんびりしたりしながらね。今はもうそんなにしょっちゅうできるわけじゃないから、レコーディングは本当に楽しいの。
── １曲目のインスト・ナンバー「DARK CORNERS I」に

# L'ALTRA BEADILY #04

続く２曲目の「NOTHING CAN TEAR IT APART」ですが、中盤のコーラスのラインであなた達の声が交錯した瞬間、『TELEPATHIC』は傑作に違いない！という予感に震えました。この曲の持つメッセージは何でしょうか？　また、実質的なオープニングに持ってきた理由も教えてください。
リンゼイ：そう、「NOTHING CAN TEAR IT APART」は私にとって明白なオープニングよ。だって、この曲で舞台の幕が上がるんだから。誰も私達を引き裂くことはできないのよ。ジョーと私はこのアルバムでも過去のアルバムでもそれぞれ別々に歌ってきた。でも私達の声がよくマッチする曲こそが、とてもラルトラ的な曲だと思うの。私達がもう離れないっていう内容を私達がいっしょに歌うオープニングって、素晴らしいと思う。ロマンティックでしょ？　歌詞は完全にジョーの才能によるものだから、彼に話させましょう。
ジョー：この曲は、ある種の勝利だね。ぼくらがどうにかお互いの元に戻って、音楽を作り続けることに対するね。もしくは、少なくともそれにまつわることだよ。
── また、７曲目の「EITHER WAS THE OTHER'S MINE」は今作で、いえ、2010年でも最も衝撃を受けたと言っても過言ではないほど美しい曲ですね。この曲はどのような心象風景を描き出したものなのでしょうか？　それとも、事実を歌ったもの？
リンゼイ：この曲は事実を歌ったものよ。そうとだけ、言っておくわ。
ジョー：この曲はリンゼイが書いたもので、ぼくはただ見守って、ちょっとした雰囲気を付け加えただけさ。そう、美しい曲だよ。ギタリストのフレドなんて、ギターを録っている間、涙が止まらなかったって言っていたよ。
── いまリンゼイが言葉を濁したように、『TELEPATHIC』は全体を通じて、お互いが双方に対する言葉にできない思い、直接的な表現では伝えることのできない思いを、抽象的な表現でやりとりしているように思えてなりません。その点はいかがでしょうか？
リンゼイ：あなたの意見は正しいと思うわ。私はメロディやアレンジ、歌詞を考える時、ただ言葉を発するという行為を超えた何かを表現するように心がけているの。言語を超えた感情を探ったり、表現したりするためによ。例えば、「BLACK WIND」のバックで渦巻いている叫びに似たコーラスのレイヤーや、「BOYS」での不気味なヴォーカルとか。これらの曲はジョーがフロントで歌っていて、そこに私なりの解釈で溶け込む方法を見つけたの。以前のレコーディングだったら彼ともっと直接的に争ったかもしれない。でもこのアルバムではうまく調和する方法を見つけたのよ。
ジョー：ぼく達のすることはすべて感覚と直感に基づいているんだ。それを、リスナーとも共有できるとうれしいね。
── ラルトラは活動開始から10年が経ちます。一区切りではないですが、これまでの３作品を振り返ってもらってもいいでしょうか？　まず、『MUSIC OF A SINKING OCCASION』。aesthetics史上で最高傑作という評価もありますし、ぼくも１枚選ぶとするなら、このアルバムを選びます。
ジョー：それぞれのアルバムが、ぼくの人生のある特定の期間のドキュメントのようなものなんだ。古い写真のようなね。だから客観的に評価することはできないよ。ぼく達が過ごしてきた瞬間のイメージなんだからね。
リンゼイ：私もよ。だって全部自分が作ったものだから。それぞれが私の人生のある時間を反映してる。ある意味で、過去の作品を通して、私は自分の人生を辿ることができるの。成長してる自分、とても若くてナイーヴな自分、学んでいる自分をね。素晴らしいドキュメンテーションだわ。そこに刻まれた音楽と歴史、そのすべてに感謝してるの。
── では、一点だけ。『IN THE AFTERNOON』は前作と同等の高評価を得ている作品ですが、お２人は内容に満足していないとも聞きます。その説は本当ですか？
ジョー：当時のベーシストのケンは満足してなかったね。その時のベストは尽くしたんだ。それは間違いないよ。ところどころ、ちょっと曲の構造がおかしかったり複雑かな？と思ったりもするけどね。
リンゼイ：『IN THE AFTERNOON』での作業は、確かにとても混乱していたわ。でもがっかりしてるわけじゃないの。このアルバムは流動的なのよ。とてもたくさんの混乱と感情と、ほんの少しの怒りがあるわ。ちょっと生々しいのよ。レコーディングもとても生き生きとして、そして生々しかった。もしかしたら、だからこそみんな好きなのかもね。
── では少し話題を変えて、音楽業界は激動の時代を迎えていますが、あなたの目に現状はどのように映りますか？　10年前と今では別世界ほど変化していると思うのですが。ちなみに、シカゴも変わりましたか？
ジョー：音楽業界が死んだ、もしくは死にかけているのは悲しいことだね。レコードを作ってリリースするのが、10年前より確実に難しくなってる。ぼく達は、いつもちゃんとレーベルが見つかって、ツアーもできているから、とてもラッキーだと思うよ。世界はもうめちゃくちゃさ。あまり絶望的なことは言いたくないけど、そんな風に思っているよ。
リンゼイ：業界がどんなに性急に変わりつつあるのかについては、もう考えないようになったわ。気にしてないの。私は音楽を作って、ショウをやり続けて、願わくばみんなにも聴き続けてほしいと思うだけ。私達に必要なのはそれだけなのよ。プレイヤーとリスナー。それこそが永遠に変わらずに残り続けるすべてだと思っているから。
ジョー：そう、ぼく達はアートや音楽にあるほんの少しの“美しさ”に夢中になるんだ。世の中は今こそそういう純粋なものを必要としていると思うしね。でも、シカゴは相変わらず良いところだよ。必要とし合い、クリエイティヴな面でも生活面でもお互いを助け合う友人達がいるからね。
── では最後の質問です。アルバム・タイトルでもあるM-10「TELEPATHIC」では、“Listen for the sounds you keep inside. Those are mine.”と最後に歌われます。空白は埋まり、今後への新たなヴィジョン、創作意欲の芽生えを表現しているように感じたのですが、いかがですか？　ラルトラは今後も継続していくのでしょうか？
ジョー：そう願うよ。長くて、奇妙で、そして愛すべき道のりだった。ラルトラは続くよ。これからもずっとね。
リンゼイ：そうね、今回のリリースで私はこれからもジョーと音楽を作っていくんだなって思えたわ。創作意欲にまた火が付いたと言えると思う。そして、それはまだ消えていないのよ。

『TELEPATHIC』
［YOUTH-100 / & records］
2010.9.15 out

# BLONDE REDHEAD BEADILY #05

TEXT BY KAZUMICHI SATO, PHOTOGRAPH BY NICOLA D'AMICO

**90年代前半から現在に至るまで名インディ・レーベルを渡り歩き、長いキャリアを誇る
イタリア出身の双子アメデオとシモーネと日本人女性KAZUからなるNYのベースレス・バンド、
ブロンド・レッドヘッドの通算８枚目のアルバム『PENNY SPARKLE』が完成した。
オルタナティヴ〜ドリーム・ポップのエッセンスを凝縮させたかのようなギター・サウンドを展開した
前作『23』の成功を経て、３年振りとなる本作は果たしてどのような作品となったのだろうか？**

ブロンド・レッドヘッドの新作『PENNY SPARKLE』は、恐らく一般的には問題作として多くの人々に受け止められるのではないかと思う。というのは、多くの人々を魅了した前作『23』から大きな変化を遂げているからだ。しかし、この客観的な「変化」は今という時代、最早そのままストレートな意味では捉えきれない部分もあるのではないかと思う。

プリミティヴなシンセ・ポップにダークな感覚が溶け合ったような音もあれば、一方で５曲目「LOVE OR PRISON」のように初期のコクトー・ツインズを思い出させる響きもあったりと、全体的には80年代の４ADの音を現代的にアップデートさせたという印象を受ける。ギターは以前よりも格段に減り、ポップな旋律も大幅に姿を消した。その代わりとして、ひきつり気味の奇妙なビートとグルーミーなシンセの膜がうっすらと敷かれた、隙間の多いサウンドによるプロダクションがフィーチャーされており、その上をKAZUのヴォーカルが艶めかしく漂うという、抽象度の高いミステリアスな余韻を残すアルバムに仕上がっている。もちろんこれと似たアプローチは前作（特に後半部分で）でも試みられていたが、ほぼ全体がこの方向性でまとめられているのは今回が初めてだろう。よって、一見「冒険作」もしくは「実験作」と評されてしまうタイプの作品のように思われる。しかし、いざバンド側の立場で考えてみれば、こうした方向性は活動を続けていく中で無意識的に不可避なものだったのではないだろうか。

「“Penny Sparkle”が何を表しているのかはまだ私にははっきりとは言えない。ただ、完成させるためにどこか遠くへ旅をしたいと言ったのを覚えている」とメンバーのKAZUは資料中のインタヴュー内で語っている。本作はバンドがスウェーデンのストックホルムに渡り、あのフィーヴァー・レイ（ザ・ナイフ）のデビュー作のプロデュースを手がけたヴァン・リヴァース＆ザ・サブリミナル・キッドというプロダクション・チームとの共同作業によって生まれたものだ（ミックスは前作に引き続きマイ・ブラッディ・ヴァレンタインで有名なアラン・モウルダーが担当）。このスウェーデン録音という行為には、それだけの大きな新しい刺激を得る必要があった、というバンド側の強い思いのようなものの存在を裏側に偲ばせる。もちろん、2007年の『23』が内容、セールスともに高く評価され、ニューヨーク・オルタナティヴのトップとして大きく注目されたというプレッシャーもそこにはあったのかもしれない。しかし、それよりも、「現役バンド」として生き残るための彼らの「本能」があえてそうさせた、というニュアンスの方が音からは強く感じられる。

長年活動を続けるロック・バンドの多くがよく口にする「変化」、すなわち「以前とは異なるアプローチで、自分達にも予想が付かないような刺激になるものを作りたかった」という発言の裏には、何かしらの変化を常に遂げていかないとバンドは（存続すること自体は可能だけれど）表現者としては死んでしまうのだ、という強迫観念にも似た、しかしある意味まったくもって正しい直感的な「認識」がべったりと貼りついている。特に彼らのようにレコード・デビューから10年以上を迎え、アルバムも８枚を重ねるような存在となると、衝動や情熱でどうにかできた時期はとうに過ぎ、袋小路やルーティンの罠にハマらないための解決法として何かしらの「変化」を必要とするのはごく自然な流れといえるだろう。それまでの集大成的とも言える充実した作品を作り上げた後では尚更だ。いや、そもそも『23』自体、これまでになくポップで親しみやすいギター・サウンドを展開したという意味ではバンドにとって「挑戦的」な作品だった。その姿勢を再び違うベクトルで発揮した結果が本作なのだ。そう、サウンドそのものは大きく変化したが、「変化を求める」というアティチュードそのものは前作同様に不変である。故に、これは問題作でも何でもなく、紛れもない「現役バンド」だけが生み出し得る表現として非常に健全で正しいアルバムだと言えるだろう。

ブロンド・レッドヘッドがこの真摯な姿勢を崩さない限り、これからも素晴らしい作品を発表していくはずだ。彼らは自らの直感に従って生きている。そして、その生々しい息吹がこのアルバムには詰まっている。「私はこういう風にアルバムを作ったことがないけれど、たとえまたこのアルバムを作る前の時間に戻れたとしても、まったく同じやり方をすると思うわ」というKAZUの言葉が聞ける限り、彼らは大丈夫だ。

『PENNY SPARKLE』
［BGJ-10098 ／ Hostess Entertainment］
2010.9.22 out

# TERA MELOS BEADILY #06

INTERVIEW & TEXT BY AZUSA HASEGAWA, TRANSLATION BY YUMI UESHIMA

**過去２作を網羅した『DRUGS/COMPLEX』で日本デビュー、直後の初来日ツアーも大盛り上がりだったテラ・メロス。待望のフル新曲で構成された『PATAGONIAN RATS』は初の全曲歌ものと、バンド自身も未踏の新境地へ。元々、泣きエモの要素も見え隠れしていた楽曲に歌が入り、ポップでエモい新テラ・メロス・ワールドが完成！サックスまでもが飛び出す予測不可能なそのサウンドは中毒性も高く、一度ハマれば抜け出すのは不可能!?そんな『PATAGONIAN RATS』の取扱説明書にもなりそうな、ニック＆ネイサンとのインタヴューをどうぞ！**

TERA MELOS JAPAN TOUR 2010

2010.10.11 @ PEPPERLAND, OKAYAMA
2010.10.12 @ GRAF, FUKUOKA
2010.10.13 @ METRO, KYOTO
2010.10.14 @ SUNSUI, OSAKA
2010.10.15 @ TIGHT ROPE, NAGOYA
2010.10.16 @ UNIT, DAIKANYAMA
2010.10.17 @ SUPER DELUXE, ROPPONGI
2010.10.18 @ SANDINISTA, YAMAGATA
2010.10.19 @ SUBLIME, AOMORI
2010.10.20 @ CLUB CHANGE, MORIOKA
2010.10.21 @ PARK SQUARE, SENDAI
2010.10.22 @ MAIRO, TOYAMA

―― ニュー・アルバムの完成おめでとうございます。まずは今の気持ちを率直に教えてください。
ニック・ラインハルト（Vo., G, Effects, Key. & Sampler）：ありがとう、このアルバムが完成してすごくワクワクしているよ。初めて自分達のすべてを出し切ったって感じの作品に仕上がったと思うからね。
―― あなた達にとっても『PATAGONIAN RATS』は新境地というか、かなりチャレンジだったアルバムじゃないかと思いますが、実際レコーディングはスムーズに進みましたか？
ネイサン・ラトーナ（B & Effects）：うん、チャレンジだったけど、案外うまく進んだって感じだよ。今回は友達の家の寝室でレコーディングしたんだ。ドラムのパートを録音してもらった以外は、すべて自分達でレコーディングしたよ。
―― "PATAGONIAN RATS" というタイトルにはどんな意味合いが込められているんですか？　アウトドア・ウェアのpatagoniaは関係してたりする？
ニック：アウトドア・ブランドのpatagoniaとはまったく関係ないよ。"PATAGONIAN RATS" には特に意味はないんだ。ただ２つの単語の美的な魅力に惹かれたっていうか。このタイトルを決めてからアルバム制作が軌道に乗ったし、アートワークとかその他の要素が、自然と"PATAGONIAN RATS" が意味するものにつながっていったんだよ。
―― 今作にテーマのようなものはありますか？
ネイサン：特にコンセプトとかはないけど、俺達は技術的に優れてるってだけじゃなく、心に残るようなアルバムを作りたかった。これは『DRUGS/COMPLEX』の制作時にも念頭にあったけど、今回の方がより鮮明になったと思うよ。
―― では各曲についても伺います。１曲目の「SO OCCULT」はイントロ的な短い曲ですが、あなた達の新しい世界観を感じられます。神秘的な響きもある曲ですが、この曲ではどのようなことを歌っているんですか？
ニック：「SO OCCULT」は35秒の中にメッセージが詰まった曲なんだ。詞的には、世界の政治とか宗教の概要みたいな内容かな？　ビーチ・ボーイズの「MEANT FOR YOU」って曲をちょっとダークにしたようなね。あの曲は俺が好きなビーチ・ボーイズの曲の１つで、38秒の曲なんだ。短い時間の中で、音楽的かつアーティスティックな表現に挑戦するのって楽しいんだよ。
―― リード・トラックでもある「THE SKIN SURF」は『COMPLEX FULL OF PHANTOMS』に近い印象を受けましたが、この曲はいつ頃書かれたんですか？
ネイサン：この曲は去年の２月に作曲したんだ。アルバムのPRのためにジョン（・クラーディ／Dr.）と書いた曲の１つさ。あの時は３人で３曲、集中してレコーディングしたんだ。その３曲ってのが、「THE SKIN SURF」と「APED」。残りのもう１曲は外れたんだ。
―― ５曲目の「TRIDENT TAIL」では、後半にサックスの音が入っていて驚きました。あれはあなた達のうちの誰かが演奏しているんですか？　それとも別の誰かが？　また、サックスを入れようと思ったのはなぜ？
ネイサン：高校の頃に好きだったサクラメント出身のFILIBUSTERってスカ・バンドがいて、そのバンドでサックスをやってるジェイソン・ボッグスってヤツと知り合いなんだ。今回、サックスの音がほしいと思った時に真っ先に浮かんだのが彼で、頼んでみたら忙しい合間を縫って来てくれたんだ。「ANOTHER SURF」と「WESTHAM UNITED」でも彼のサックスが聴けるよ！
―― 「PARTY WITH GINA」は『COMPLEX FULL OF PHANTOMS』収録の「PARTY WITH TINA」とは何か関連があるんですか？
ニック：２つの歌詞の間にはテーマ的な繋がりが少しあるね。"Gina" って "Tina" のメガ版って感じだし、曲の構成とかもこの２曲は似てるしね。３部作として締め括りの１曲がこれから出てくると思うよ。
―― 10曲目の「ANOTHER SURF」は、かなりフリーキーでアヴァンギャルドな曲ですね？
ネイサン：「THE SKIN SURF」のエンド・リフがスゴイ気に入って、ドラムをレコーディングしてた時に、ジョンにそのエンド・リフをできるだけプレイし続けてくれって頼んだんだ。それを元にアルバムに合った新しい曲を作っていったんだよ。結果的には「THE SKIN SURF」よりもっとクレイジーな曲になったけどね（笑）。
―― また、あなた達のTumblrで『ザ・シンプソンズ』のアニメを使った「ANOTHER SURF」の動画がアップされてましたが、あれはあなた達自身で作ったんですか？（笑）
ニック：うん、あのビデオは俺達が作ったんだよ（笑）。元々、俺達は『ザ・シンプソンズ』の大ファンで、特に「ツリーハウス・オブ・ホラー」っていうエピソードが気に入ってて。その話にはPVに使いたいシーンが盛りだくさんって感じだったんだ。フランダースの犬が悪魔になって出てくる所とかね。映像に合う曲の一部分を選ぶのはちょっと大変だったけど、でもエレベーターから血が出てくるのとドラムの強弱が完璧にマッチしたり、Mr. Burnsが溶けるのと同時にドラムも強くなったりとか、うまくいったんじゃないかな？　とにかく、あのビデオを作るのは本当に楽しかったよ！
―― 本作のレコーディング中に何か印象的だった瞬間や強烈な閃きが降りてきた瞬間など、もしあれば教えてください。
ニック：そういう瞬間はたくさんあったよ。特に「FROZEN ZOO」と、「MANER THE MAGIC」の組み立て作業の時かな？「組み立て」って言ったのは、この２曲が他の曲とは違う方法で作り出されたからなんだ。いつもはリハーサルを重ねて１つの曲を作るんだけど、この２曲はいわゆるテープのエディットで生まれたサンプルとか、小さなアイデアを組み立てて完成させたんだ。エレクトロの曲を作る時みたいで、すごくエキサイティングな経験だったね。
―― 10月には日本ツアーも決定していますね！　今回は長い間日本に滞在するそうですが、楽しみにしていることってありますか？
ネイサン：マイク・ワットやLITEとツアーできるなんてクールだよ！　それにまだ言えないけどサプライズなフェス出演も決まってて、どうなるか楽しみだね。それに何て名前か忘れたけど、ニックと俺はチョコワッフルコーンの100円アイスが大好きなんだ。だからあれをたくさん食べたいよ。
ニック：あとじゃがりこも（笑）。10月が待ちきれないよ！　日本にまた行けるのを楽しみにしてるんだ。じゃがりこ、じゃがりこ！

『PATAGONIAN RATS』
［RDCP-1006 / Parabolica］
2010.9.8 out

BEADILY #07

# BING JI LING

INTERVIEW & TEXT BY SO KATAOKA, TRANSLATION BY MITSURO WAKI

**盟友トミー・ゲレロが、「アイツほどソウルフルな男はいない。間違いなく本物だよ！」と最大級の賛辞を贈る、最高にエレガントでロマンティックなパーティ・ナンバーを操るファンキー・ガイ、“ビン・ジ・リン”ことクイン・ルークが、3rdアルバム『SHADOW TO SHINE』を完成させた。彼が愛して止まないソウル、ファンク、ディスコに加え、ロックやバロック、バカラック級の美メロまで網羅した、過去最高にコンテンポラリーな仕上がりに脱帽。カザールに隠されたその瞳は、きっと自信に満ちているはず！**

© CAROLINAPALMGRENPHOTOGRAPHY.COM

―― まずはあなた自身について少し聞かせてください。“ビン・ジ・リン”というステージ・ネームの由来とは？ 中国語でアイス・クリームという意味だそうですが。

クイン・ルーク（Vo. & Multi-instrumental）：上海に１年ぐらい住んでいたことがあるんだよ。上海に到着してすぐに、バーで女の子に名前を聞かれてね。「クイン」って言ったんだけど、彼女には「クリーム」って聞こえて、「クリームって、アイス・クリームとかのクリーム？」って言われたよ。「違う！」って言ったんだけど、もう時すでに遅し（笑）。その瞬間から、オレは“ビン・ジ・リン”になったんだ。

―― あなたはあらゆる楽器や機材に精通したマルチ・ミュージシャンであり、優れたシンガーであり、また作曲家／プロデューサーとしても多方面に活躍していますよね。そもそも音楽にハマったきっかけは何だったんです？

クイン：そう言ってもらえるのは光栄だけど、実は自分では２流のミュージシャンだと思っていて……これだっていう１つの楽器や音、プロジェクトに絞れないんだよ！ 音楽に対する飢餓みたいなものでここまで成長できたと思ってはいるんだけどね。とても音楽に溢れた家庭環境で育ったんだ。父さんは60年代にサン・フランシスコで活躍したミュージシャンだった。幼い頃に音楽と心が共鳴し合った時から、音楽とともに人生を歩むってわかっていたよ！

―― すごく納得です。では、そんなあなたの人生のサウンドトラックとも言える愛聴盤を５枚挙げるとすれば？

クイン：いまパッと思い浮かんだのは、スティーヴィー・ワンダー『SONGS IN THE KEY OF LIFE』、シュギー・オーティス『INSPIRATION INFORMATION』、ジョン・コルトレーン『GIANT STEPS』、スライ＆ザ・ファミリー・ストーン『FRESH』、シャーデー『LOVE DELUXE』かな？ すべてにおいて完璧なレコードだと思っているよ。

―― 個性的なファッション・センスも目を引きますが、特にカザールのサングラスにはこだわりがあるんですか？

クイン：ありがとう！ ファッションは自分を外に向けて紹介するために重要だからね。特にカザールは大好きで、結構な数のコレクションを持っているよ。元々目が本当に悪くて、メガネをしなきゃダメなんだ。でも、どうせなら楽しもうと思ってね！ 派手なフレームのものが好みだよ。

―― では、ニュー・アルバム『SHADOW TO SHINE』について聴かせてください。今作はあなたのルーツであるソウル、ファンク、R＆B、ディスコに加え、アーバン・ポップにサイケデリック・ロック、バロックなど過去最高にバラエティに富んだ内容になっていますが、どのようなコンセプト／ヴィジョンでコーディングに臨みましたか？

クイン：アーバンかつバロック？ 良い響きだ！ でも実際、今回そういった選択はプロデューサーに一任したんだ。オレは作曲と歌うことに専念してね。ダニエル・コラスとショーン・マーカンドは、今までオレがあまりやっていなかった分野に導いてくれたよ。今作の方向性を示す例として、彼らはラヴを挙げてたな。他にも、スモーキー・ロビンソンやカシアーノ、ザ・シルヴァーズとかをね。

―― なるほど。今回は作曲と歌のみに専念し、プロデュースを２人に任せようと思ったのはなぜですか？

クイン：これまでアルバム３枚を自分だけで作曲、編曲、演奏、エンジニアリング、ミキシングと徹底的に作り込んできて、もうそろそろそういう作業から離れて、外から人を入れてみるべきだと感じたんだ。すべての作業を自分１人で同時進行というのは、自分の音楽にとって良くないことのようにも思えてね。もちろんプロデューサー、アレンジャー業にも興味はあるよ。でも今はこのやり方の方が好きだね。

―― ダニエルとショーンをプロデューサーに起用したのは、やはりザ・フェノメナル・ハンドクラップ・バンド（以下PHB）で活動をともにした関係から？

クイン：実はダニエルにはそれ以前から注目していて、彼がプロデュースしたジョー・バターン作品のファンだったんだ。で、彼とはいつか仕事したいってずっと思っていてね。願いごとは慎重に。なぜって叶ってしまうからさ！ 知り合った経緯の詳細は省くけど、ダニエルとはいつのまにか親しくなっていて、PHBにも自然と加わることになって、最初のショウではヴォーカル＆ギターの座に収まってたんだ。その役割が今作でも変わらなかったって感じだね（笑）。

――（笑）あなたらしい流れですね。ところで、M-2「BYE BYE」や「HOLD TIGHT」でのヘヴィなギター・サウンドは意外性があって新鮮でした。先ほどラヴを引き合いに出されてましたが、あなた自身はロックも聴きますか？

クイン：ロックも好きだよ。ただオレはソウル、ファンク、ディスコをより愛しているんだ。実はラヴは、サン・フランシスコで苦楽をともにしたオレの長年の師であり、父であり、また兄であり友人でもあったジョン・コナティが大好きだったんだ。だから、いつもオレにそれっぽいことをやらせようと仕向けていたよ。彼は亡くなってしまったけど、今になってオレがようやくラヴっぽいことをやり出したのを喜んでくれているんじゃないかな？

―― タイトルを『SHADOW TO SHINE』にした理由は？

クイン：このアルバムはオレの音楽性の新しいチャプターを示すものなんだ。初めて自分１人で作らなかったからね。それに、オレの人生の新しいチャプターを示してもいる。今回はNYに引っ越して、ダニエルとショーンのスタジオでレコーディングした。これはオレの人生にとっても重要な出来事なんだよ。NYで新たな生活を始めるとか、やってみたかったことがいくつか実現できた。つまり、“Shadow to Shine”とは、オレが人生の新しいステップに踏み出すことの象徴なんだよ。

―― 今後の活動予定を教えてください。あなたはソロやPHB以外にも、COPPA、Q＆A、盟友トミー・ゲレロとの活動など非常に幅広く活動していますが、どんなバランスで続けていく予定ですか？

クイン：実は去年の秋からINCARNATIONSってプロジェクトをさらに始めててね（笑）。要チェックで頼むよ、本当に最高だから！ 確かにいろいろやってるから、偏りはあるよ。でも、すべてのプロジェクトに関われるよう最大限努力しているつもりさ。ただ、あまりに忙しすぎて、混乱して自分の足を銃で撃ったりするようなことだけは避けたいけどね。

―― では最後に究極の２択を。音楽と女性、どちらか選ばなければならないとしたら、どちらを選びます？（笑）

クイン：女性だね。なぜなら音楽はいいニオイもしないし、キスもできなければ、愛し合うことも不可能だろ？ 第一、話せないじゃないか！ 会話が楽しめないなんて最高に退屈だよ！（笑）

『SHADOW TO SHINE』
〔DDCB-12521 / RUSH! PRODUCTION x AWDR/LR2〕
2010.9.8 out

# BEADILY #08 YAMON YAMON

INTERVIEW & TEXT BY ATSUTAKE KANEKO, TRANSLATION BY KOTARO MITSUNO

**何とも不思議なバンド名を持ったスウェーデン・ストックホルム出身の４人組が日本デビューを果たす。流麗なギター・フレーズとメロディを存分に詰め込んだ初のフル・アルバム『THIS WILDERLESSNESS』は、キンセラ周辺やシー・アンド・ケイクといったシカゴ・シーンからの影響をよりポップに昇華させた好盤で、US インディ・ファンの耳と心を鷲掴みにする可能性を多分に持った作品だと言っていいだろう。同郷ラスト・デイズ・オブ・エイプリルとの意外な接点も飛び出したインタヴューをどうぞ。**

―― まずは、バンド結成のいきさつを教えてください。
クリストファー・オバーグ・ランフォース（Dr.）：バンドを組んだのはもう何年も何年も前になるね。ウプサラというスウェーデンの小さな街で、ぼくとジョン（・レンブラッド／Vo.& G）の２人で結成したんだ。当時はインストゥルメンタルのポスト・ロックをやっていたよ。で、結成して間もなく学校やウプサラの近くの森で何度か演奏していくうちに 、新しい音楽の方向性に興味を持ち出したんだ。
―― 森で演奏してたんですね（笑）。新しい方向性とは？
クリストファー：もっとしっかりとした歌や、クレイジーなギター・フレーズをフィーチャーしたリズミカルな曲を作りたくなってきてね。早速そのアプローチでやり始めて、ジョン（・リンデル／B）とアントン（・トゥーレル／G）が加入したんだ。とは言っても、まずジョンが加入して、数年後にアントンが加入したって感じなんだけどね。
―― “ヤモン・ヤモン”という不思議なバンド名にはどんな意味があるのですか？
クリストファー：７年前ぐらいだったかな……みんなでカッコいいバンド名を考えようと思ったんだけど、全然決まらなくてね。それで、インターネットでぼーっと検索してたら、ペネロペ・クルスが主演の『JAMON JAMON』という映画を見つけてね。“Jamon”は直訳するとハムのことなんだけど、それが妙に心に残ってさ。それをみんなに伝えたら気に入ってもらえたんだ。でも、それじゃちょっと捻りが足りなかったから、“Yamon Yamon”に変えてみたらもっとカッコよく聞こえたんで、即採用となったってわけ。まぁ、この通り深い意味は特になくて、ほぼノリで決まった感じなんだ。ちなみに、ジャマイカのスラングだと「くだらねえこと言ってんじゃねえよ」って意味になるらしいんだけど（笑）。
――（笑）以前はインストのポスト・ロックをやっていたとのことですが、ヤモン・ヤモンの楽曲からはシカゴのポスト・ロック・シーンからの影響が感じられます。実際そういったバンドはお好きですか？
クリストファー：そうだね、メンバー揃ってシカゴのポスト・ロックが大好きだから、確実に影響はされていると思うよ。ぼくの場合、ティム・キンセラは最も偉大なソングライターだと思うし、メイク・ビリーヴのドラマー（ネイト・キンセラ）は神だと思っているよ（笑）。
―― 他にはどんなバンドから影響を受けていますか？
クリストファー：パンクからジャズ、ノイズ、ヒップ・ホップまで、受けた影響はものすごく多岐に渡っていると思う。これといったバンドをピンポイントで挙げるのは非常に難しいけど、敢えて挙げるとしたらモグワイやシー・アンド・ケイク、あとはウィルコとカプン・ジャズ辺りは確実だと思うよ。
―― スウェーデンのバンドならではのポップさも感じます。国内のバンドではどういったバンドから影響を受けていますか？
クリストファー：他のみんなはどうかわからないけど、ぼくの場合スウェーデン出身のバンドで１番影響を受けたのはリフューズド（90年代に活躍したハードコア・パンク・バンド）とブローダー・ダニエル（主に90年代に活躍したオルタナ・バンド。メンバーの自殺に伴い、2008年に解散）だね。
―― 2008年にデビューEPがリリースされていると思うのですが、今回のアルバムまで少し時間が空きました。その理由は？
クリストファー：１番の理由はみんなの満足できる作品を作りたかったってことだね。それとメンバーそれぞれが仕事やプライベートでいろいろ忙しかったこともあって、時間を作るのが大変だったことがもう１つの理由かな？
―― 曲作りの方法は？　誰かメインとなるソング・ライターがいるのですか？
クリストファー：基本的にはヴォーカルのジョンが歌やリフ、コーラスなんかのアイデアを持ってきて、それをみんなで

BEADILY #08

# YAMON YAMON

合わせてみるんだ。とにかくしっくりくるまで何度も何度も音合わせをしているね。たまにジョンの持ってくるアイデアがベース・ラインだけだったり、ドラムのリズムだけだったりする時もあるけど、どんなアイデアだろうと、みんながしっくりくるまで音を合わせることに変わりはないよ。

―― MySpaceに映像がアップされている「THE DARKER PLACE」は、そのタイトルとは裏腹に実にポップな名曲だと思います。ギター・フレーズが非常に印象的ですが、この曲はどうやってできたのですか？

クリストファー：ええと……特におもしろいエピソードはなくて、ジョンが持ってきたギター・フレーズを曲にしただけなんだ（笑）。

―― では「AFRICAN NIGHTS」ですが、8分に及ぶ大曲にも関わらず、その長さを感じさせない、こちらも素晴らしい曲だと思います。この曲について何かエピソードがあれば教えてください。

クリストファー：この曲は今の形になるまでにすごく長い時間をかけて実験した曲なんだ。当初はまったく違う雰囲気の曲で、テンポから構成まで全然違ったね。最後のゆっくりした部分もなくて、コーラスのメロディまで完璧に違ったんだけど、最終的には今の形に落ち着いたんだ。

―― 歌詞には統一されたテーマはありますか？

クリストファー：ぼくの個人的な解釈だと、それぞれの曲にテーマがあって、それらを統合した時に初めて『THIS WILDERLESSNESS』のストーリーができあがると思ってるんだ。ちょっと言葉にするのは難しいけど。

―― ではその『THIS WILDERLESSNESS』というタイトルの由来は？

クリストファー：最初は『665 THE NUMBER OF THE NEIGHBOR OF THE BEAST』にする予定だったんだけど、改めて考え直してみるとアホすぎて笑いが止まらなくてさ（笑）。自分達の音楽の雰囲気にも合わないだろうってことで、結局ボツにしたんだ。その後もなかなか決まらなかったから、いい加減決めないとってことで、ぼくが少しマジメに考え直してみて、すべてを通して聴いてみた時に連想したのが森でさ。それで、『THIS WILDERLESSNESS』って呼ぶことにしたんだ。

―― やはり森ですか（笑）。ちなみに、スウェーデンにはヤモン・ヤモンに近い音楽性を持ったバンドのシーンのようなものはあるのでしょうか？

クリストファー：自分の知るかぎりではないね。もしかしたらそんなシーンやバンドもいて、ぼくが見落としてるだけかもしれないけど。

―― ヤモン・ヤモンに近い音楽性を持ったスウェーデンのバンドだと、日本ではラスト・デイズ・オブ・エイプリルが有名なんですけど、彼らとの交流・接点はありますか？

クリストファー：曲を聴いたことがあるくらいで実際に会ったことはないかな……あ、そうでもない！　ラスト・デイズ・オブ・エイプリルのヴォーカルにギターを売ったことがあるはずだ！　ぼくの記憶が正しければ、あれは確かヴォーカルのカールだったはずだよ！

―― へえ！　それは意外な接点ですね。では、日本で作品がリリースされることの率直な感想を教えてください。

クリストファー：ぼく達は日本が大好きだから、日本でリリースできることがとにかくうれしいよ！

―― ありがとう（笑）。ちなみに「ALONSO」が収録された残響レコードのコンピレーション『残響RECORD COMPILATION VOL.2』は聴きましたか？　印象に残ったバンドや楽曲があれば教えてください。

クリストファー：ごめん！　実はまだ聴いてないんだ。今度聴いたら教えてあげるよ。

―― 了解です。ディス・タウン・ニーズ・ガンズというUKのバンドはあなた達に近い音楽性なのできっと気に入ると思いますよ。では最後に、バンドとして今後成し遂げたいことを教えてください。

クリストファー：そう……聴いた人が不思議な何かを感じることのできるような、そういう音楽を作れるバンドになりたいね。

『THIS WILDERLESSNESS』
［ZNR-097 / zankyo record］
2010.9.8 out

# DEERHUNTER

## ON THE COVER

INTERVIEW & TEXT BY YUYA SHIMIZU, TRANSLATED BY RISA UZUSHIRI

何かを手に入れるために、何かを失わなくてはいけないなんてことがあるのだろうか。ディアハンターの音楽を聴く度に、そんなことを考えてしまう。アルバムのリリースごとに、メンバーや親しい友人達を事故で失ってきた彼らだが、本作『HALCYON DIGEST』のレコーディングに先立って、今度は盟友のジェイ・リータードが、その命を絶ってしまったのだ。NYでの録音を含む前作『MICROCASTLE』とは対照的に、地元アトランタで、メンバーの記憶を持ち寄るようにレコーディングされたという本作。ラストに収められた「HE WOULD HAVE LAUGHED」はそんなジェイに捧げた曲だが、奇しくも今年、彼と関わりのあった3組のアーティスト達が、揃って傑作を発表している。ウェイヴス、マジック・キッズ、そしてディアハンター。29才でこの世を去ったジェイは永遠に年を取ることはなくなってしまったけれど、残された者達、そしてまたしても"救われた"ブラッドフォード・コックスはひとつ年を取り、またひとつ素晴らしい作品を届けてくれた。そんな風に言ったら、天国の"彼"は笑うのかもしれないけれど。

—— まずは昨年のジャパン・ツアーの感想について聞かせてください。あなた自身「楽しくて帰りたくない！」と話していましたが、特に印象に残っていることなどありますか？
ブラッドフォード・コックス（Vo. & G）：日本人はみんなフレンドリーだし、すべてが楽しかったよ。食事とかも健康的だし、文化や物作りに対しては素晴らしい気質を持っていると思う。アメリカ以外の国では１番好きだよ。自分の故郷は大好きだから引っ越したいとか考えたことはないけど、ジム・オルーク含め多くの外国人が移住するのもわかる気がするよ。
—— 新作のリリースに先駆け、アルバムのポスターをプリント・アウトして部屋や街中に貼って、その写真を送ってくれた人には音源をプレゼントするというキャンペーンを実施していましたね。素晴らしいアイデアだと思うのですが、これを思い付いたきっかけと、実際の反響について教えてください。
ブラッドフォード：ポスターは、他のバンド・メンバーがスタジオで録音してる間に、ソファに座ってコンピューターをただいじり回してたら出来上がったんだ。地元アセンズ的なイメージで作ってみた。ぼくはジョージア州のアセンズ出身なんだけど、この土地からはR.E.M.やB-52's、パイロン、80年代初期頃にはニューウェイヴ・バンドもたくさん輩出していて、アセンズ特有のスタイルがあるんだよ。そのイメージでポスターを作ってみたんだけど、初めは冗談だったんだ。４ADのようなレーベルがこのアイデアを気に入ってくれると思ってなかったから。笑われると思ってたけど……。「待てよ、これはぼくのアルバムじゃないか（笑）」と思い直して提案してみたよ。DIYでアマチュア的な考えだけど、実際好きなバンドのポスターを壁に貼ってた自分としては、みんながベッドルームにぼくの作ったポスターを貼って、その写真を投稿してくれたらおもしろいかなと思ったんだ。その後に世界中の人が自分の部屋だけじゃなくて街のいろんな所に貼って写真を撮って送ってくれたらもっと興味深いものになると思い直してね。このぼくのポスターがどこまで旅をするのかが気になったんだ。ぼく的にはちょっとした洒落たプロジェクトだったんだけど、世界中のファンが参加してくれてとても良い反響だったよ。ぼくも好きなバンドがいたら絶対参加するね。昔はポスターとか壁に貼ったりしてたけど、最近見ないよね。今はインターネットの世界が確立されていて、音楽はそのネット上で存在している感じがする。音楽っていうのはもっと社会的なものだったでしょ？　学校で友達と音楽の話をしたり、好きなバンドのステッカーを車に貼ったりさ。そういうことでさらに愛情が増して、音楽が自分にとって意味のあるものになっていったと思うんだ。
—— 今回のエンジニアにベン・アレンを起用したのは、もちろんアニマル・コレクティヴや、地元のヒップホップ・ユニットであるナールズ・バークレイからの影響もあったと思うのですが、決め手は何だったのでしょう？　また、実際に作業してみて、仕上がりについてはどう思いますか？
ブラッドフォード：ベン・アレンを採用した理由は、家が近所だからだよ。このアルバムは地元のメンバーでまとめたかったし、家でのんびり、リラックスした環境でアルバムを制作したかったから。日曜日の午後にレコーディングをしてても、母親にちょっと会いに行けたりね。彼のアニマル・コレクティヴとの仕事は尊敬するけど、起用した時はそういうことは考えてなかった。アニマル・コレクティヴみたいなアルバムを作る気はなかったしね。彼らの音はポップでダンスだし、なんていうか、奇妙なポップ・アルバムって感じ。ぼくらも奇妙なポップ・アルバムと言えばそうだけど、アニマル・コレクティヴはもっとエレクトロニックやサンプルを軸に曲を構成していて、ぼくらはサンプルは使わない。全部ギターとドラムだからね。でもベンといっしょに仕事してやりやすかったよ。アルバムの出来にも満足しているしね。
—— アルバム収録曲のうち、１曲目や８曲目の「HELICOPTER」のようなドリーミーな曲はベン・アレンとの相性が良さそうですが、普段のあなた達のようなバンド・サウンドは、彼自身これまでにあまり手掛けてこなかったのではないかと思います。そういった点で、何か気を付けたことはありますか？
ブラッドフォード：確かにベンは曲を飛躍的に良くしてくれた。ぼくが作ったすべてのビートやサウンドやエフェクトを、ベンはうまく編集してくれたね。彼の役目はDJみたいな感じだよ。ベンはロック・バンドともたくさん仕事をしたことがあるけど、ぼくらみたいなタイプのバンドと仕事した経験はあまりなかったからね。ぼくらは彼にまったく新しいサウンドを持ち込んだと思う。ベンは素晴らしい記憶の持ち主で、曲のパートを選ぶ上で完璧な選択をしてくれたと思うけど、逆に難しかった曲もある。ぼくと音楽の聴き方が違うからね。曲のパートを録音した後、お互いが違う方向性に行きそうになると話し合ったりして決めた。あくまでも民主主義的にね。
—— いま挙げたような曲には、キーボードがフィーチャーされていたり、４人だけでライヴで再現するのは難しい部分もあると思うのですが、ソロ・プロジェクトのアトラス・サウンドではなく、ディアハンターとしてこういったサウンドに挑戦しようと思ったきっかけは？
ブラッドフォード：ぼくはアトラス・サウンドとディアハンターのサウンドを区別したことはないし、プロジェクトごとに特定のサウンドを定義しているわけでもないんだ。でも秘密を教えるよ。このアルバムにはキーボードは使用されていなくて、すべてギターによって演奏されているんだ。ギターにエレクトロニック機材を使って、エフェクトをかけたら不思議な音になったんだ。キーボードも使ってみたいけど必要ないんだよね。あっ、「CORONADO」ではサックスの音といっしょにピアノが使われてるか。でもほとんどはギターの音なんだ。
—— あなた達の2ndアルバムから3rdアルバムへの変化を聴いて、ヴェルヴェット・アンダーグラウンドの2ndから3rdへ至る変化を思い浮かべたのですが、本作もまた、ポップスとしてより完成された曲がある一方、オールドスクールなロックンロールへの回帰も見られるなど、ヴェルヴェット・アンダーグラウンドの4thアルバムを思わせる部分があると思いました。こんな意見についてはどう思いますか？
ブラッドフォード：『THE VELVET UNDERGROUND』かな？　良い耳してるね。実はこのアルバムの制作期間中にかなり聴いてたんだよね。「WHAT GOES ON」とかさ。ぼくのアルバムの中に「SAILING」って曲あるでしょ、あの時は「JESUS」をよく聴いていたよ。彼らと比較されるなんてとっても光栄だよ。
—— 前作には「NOTHING EVER HAPPENED」を始めとして、あなた以外のメンバーによる楽曲が収録されていましたが、本作にもあなた以外のメンバーが歌っている曲が何曲かありますね。それらの曲についてのエピソードがあれば聞かせてください。
ブラッドフォード：このアルバムの「DESIRE LINES」と「FOUNTAIN STAIRS」は、ロケット（・プント／G & Vo.）がギター・パートも含めて作曲して、歌っているんだ。後の曲はすべてぼくが書いている。前作ではジョシュ（・フォーバー／B & Vo.）が曲のベース部分を持ち寄って、各々が自分のパートを作曲したんだ。このアルバムでは、ぼくやロケットが他の人のパートまで曲を書いたから、レコーディングはあらかじめ計画立てて進行した感じかな？　毎回違うんだよ。次のアルバムは個人的に書いた曲を持ち寄るんじゃなくて、バンド・メンバーが１つの部屋に籠ってコラボレーションで書き上げるようなまったく違う感じのアルバムを作りたいと思ってるんだ。多くの人がこのアルバムはアトラス・サウンドみたいだとか言うのは、ぼくがほとんど曲を書いたからかもしれないね。
—— 新作『HALCYON DIGEST』のタイトルには、あなた達にとって大事な記憶のダイジェスト、という意味が込められているそうですが、いくつか具体的な楽曲を挙げて教えてくれますか？
ブラッドフォード：具体的な曲を上げるというか、このタイトルはディアハンター結成前からいつも頭の隅にあった言葉なんだ。昔、自分が気になった雑誌の切り抜きとかを貼るコラージュ・ブックを持ってて、そこに"HALCYON DIGEST"ってタイトルを付けてたんだよ。心温まる精神薬っぽいだろ。
—— 個人的は、このアルバムを聴きながら眠りにつくのが好きだったりするのですが、実際にハルシオンという名前の睡眠薬もあったりしますよね。これは単なる偶然でしょうか？
ブラッドフォード：確かにアルバム全体を通して、ナイトタイムっぽい雰囲気はあるね。活気溢れるアルバムっていうわけじゃないからね。でも偶然だよ。
—— １曲目の「EARTHQUAKE」はテープ録音したリズム・トラックを逆再生したようなユニークなサウンドで始まりますが、この曲が誕生したきっかけについて教えてください。
ブラッドフォード：去年の冬に部屋でこの曲を書いた。ドラム・マシーンにギターのループ・ペダルで録音してそのペダルで逆再生したら、ドラム・ビートが強烈なサウンドになったんだよ。ショッキングだったね。魔術的なサウンドになってさ、そしたらすぐそのドラム・ビートに合わせて曲が浮かんできたのさ。
—— また、この曲や「HELICOPTER」からはどこか終末論的な印象を受けてしまうのですが、あなた自身はどのようなイメージを持っていますか？
ブラッドフォード：興味深いな……。「EARTHQUAKE」と

『HALCYON DIGEST』は、ほとんどの曲をぼくが書いたんだ。
曲を書く時はいつも1人で、1週間誰とも話さない時もあるよ。
ある特殊なメンタル・ゾーンに入り込んでしまっているから、
孤独や、終末論的な世界観が、描き出されるのかもしれないね。

「HELICOPTER」は同じタイミングで制作された曲なんだ。もしかしたら、終末論的な精神状態にあったのかもしれないね（笑）。
―― リード曲でもあった「REVIVAL」では「ぼくは救われた」と歌われていますが、特に最近そう感じたことがあれば教えてください。
ブラッドフォード：この曲を書いた時がそうかな？　酷い膀胱炎にかかって入院してたんだ。痛くて重症だったからこのまま死ぬと思ったよ。３週間ぐらいギターも持てない感じで、ベットに寝たきり、熱はあるし、まったく何もできなかったんだよ。でもだんだん体調が回復した頃に最初にやったのが、ギターを手に取って、この曲を書き上げることだったんだ。だからこの本当の歌詞は「膀胱炎から生き延びた」って歌ってるんだよ（笑）。だからタイトルも長期に渡る病気からの復活という意味で「REVIVAL」と付けたんだ。
―― あなたは昨年ニール・ヤングのアーカイヴをよく聴いていたそうですが、「SAILING」にはニール・ヤング、特に『ON THE BEACH』のＢ面からの影響が伺えます。彼の音楽についてはどう思いますか？
ブラッドフォード：君はすごく頭が良いね（笑）。いろんなメディアでニール・ヤング好きって書かれているみたいだけど、こうやってストレートに質問が来たのは初めてだよ。君は良い耳を持ってるね。スタジオの電気を消してバンドのメンバーに視聴してもらったアルバムだよ。曲をコピーするわけじゃないよ。でもあの作品の雰囲気というか、ああいうヴァイブにしたいんだってバンドに説明する時に、ニール・ヤングの『ON THE BEACH』を実際にかけたんだよ！
―― 「MEMORY BOY」には“こんなところもう家じゃない”というフレーズが出てきますが、あなたの家族はどんな人達だったのでしょう？
ブラッドフォード：これはぼくの家族の話じゃないけど、ぼくの両親は若い時に離婚したんだ。今でこそ親と仲がいいけど、あの時はかなりダークな時代だったよ。親に捨てられたという思いで怒りに溢れていてね。18才だったし、高校もドロップ・アウトして問題児だった頃にさらに親が突然離婚を言い出したんだ。もう大人だから１人で自分の世話をできると思ったんだろうね。あの当時ぼくにはボーイフレンドがいて、家に遊びにきていっしょにギターを弾いたり、ドラッグに溺れたりしてた。家なんだけど我が家じゃない感じ。家族はいなかったからね。わかるでしょ？　誰もが通る反抗期さ。
―― 「CORONADO」にフィーチャーされているサックスを吹いているのは誰ですか？　また、この曲にサックスを入れようと思ったきっかけは？
ブラッドフォード：あの頃、ローリング・ストーンズの『EXILE ON MAIN ST.』もよく聴いていたんだ。あのアルバムの金管楽器のセクションは素晴らしいよね。あれに感銘を受けたんだけどサックス奏者を知らなくてね。だからプロデューサーの知り合いでアセンズ出身の演奏者を紹介してもらったんだ。この曲には何かが足りないと思っていたから。良い曲に仕上げるには、新しい声や楽器が必要だと思ったんだよ。
―― アルバムの最後を飾る「HE WOULD HAVE LAUGHED」は、今年亡くなったジェイ・リータードに捧げた曲だそうですね。彼の死についてはいまだに謎も多いのですが、あなた自身はどのように受け止めていますか？
ブラッドフォード：ぼくがどのように受け止めているかはすでに歌詞で表現しているけど、このことを考えるととてもダークで困惑するし、鬱気味になる。曲はジェイ自身の視点から書いてみたんだ。２部構成に分かれていて、２番目のパートが始まるとアンビエント・ギターがバックに流れてきて、その音が最終的にはドローン系のサウンドになり、アルバムを締め括るんだ。なんだかオーバードーズしてしまった彼を表現しているような気がしたんだ。死ぬ間際の吐息、安らかな吐息のようにね。
―― この曲だけはあなたが以前住んでいた“ノータウン・マリエッタ”というビルで、１人で録音されたそうですが、その理由は？　また、そのビルは一体どんな場所なのでしょう？
ブラッドフォード：1800年代の建物で馬小屋の跡地だったんだ。実際は倉庫みたいな感じだけどね。そこでよく曲を書いたり練習したりする。ぼくは怠け者だから家で曲を書くのが好きで、「EARTHQUAKE」や「HELICOPTER」なんかは本当にベット脇にあるドラム・マシーンとペダルを使って作曲したんだ。でも「HE WOULD HAVE LAUGHED」のように生ドラムを必要とする時はあの部屋を使うんだよ。あそこにはドラム・セットが４つ置いてあるから。ボアダムスのトリビュートみたいだろ？　ぼくら大好きなんだ。あそこでボアドラムっぽくジャムるんだよ（笑）。
―― あなたの書く詞には、孤独な少年像というのがしばしば登場します。自身のソロ・プロジェクトであるアトラス・サウンドの前作『LOGOS』について、あなたは「思春期から卒業したアルバム」と話していましたが、友人や知り合いのミュージシャンが増えた今でも、そうした孤独感はつきまとっているのでしょうか？
ブラッドフォード：曲を書く時はいつも１人だから。このアルバムもほとんど１人で曲を書いたし。作曲中はある特定のメンタル・ゾーンに入り込んでしまって、１週間誰とも話さない時もある。あえて孤独になってるのかもね。
―― あなたは多作なことでも知られていますし、アルバムのリリースの合間に、毎回『FLUORESCENT GREY』や『RAIN-WATER CASSETTE EXCHANGE』といったEPをリリースしていますが、今回のセッションで録音されて、アルバムに収録されなかった曲もたくさんあるのでしょうか？　また、今後それを発表する予定はありますか？
ブラッドフォード：たくさんではないけど数曲あるよ。でもリリースする予定はない。いろいろ実験できたのはよかったけど、リリースするほどのクオリティには仕上げてないから。日本盤に収録されるボーナス・トラックは、もっとエレクトロニックなサウンドだよ。
―― それでは最後になりますが、新旧問わず、最近よく聴いているアルバムがあれば教えてください。
ブラッドフォード：マタドールのカート・ヴァイルが好きで、最近よく聴いているよ。あとはオールド・ジャズとか、世界中のワールド・ミュージックを聴いてるね。

*new disc*
『HALCYON DIGEST』
［BGJ-10103 / Hostess Entertainment］
*2010.9.22 out*

# WRITERS' LETTERS

### 愛聴盤 MOGWAI / SPECIAL MOVES/BURNING

夏フェスも終わり、高円寺阿波踊りも終わり、ちょっと抜け殻状態。METAMORPHOSEに行けば満たされるかな？ » 伊藤洋輔

### 愛聴盤 STANDARD FARE / THE NOYELLE BEAT

タロット占い師。雨の日曜日どころか１週間に３度も原美術館に行ったり、「Jenn Ghetto」で画像検索したり。Frankie Rose嬢のアルバムが楽しみ。 » かせねこリーヌ

### 愛聴盤 ROD JONES / A SENTIMENTAL EDUCATION

アイドルワイルドのギタリスト、ロッド・ジョーンズ初のソロ・アルバムは、これからの季節にぴったりの慎ましやかなフォーク・アルバムです。ぜひぜひ。 » 金子厚武

### 愛聴盤 PERFUME / VOICE

Puffy → Halcali → Perfume →???の向こう側を見せてくれるようなユルグダ女子ユニットの出現を望みます。 » 佐藤一道

### 愛聴盤 MAGIC KIDS / MEMPHIS

いつ日本は熱帯に？ ボキャブラリーが激減、「暑い」を連発してます。でも、一切夏バテしてません。というわけでWONDERKINDも頑張りますのでヨロシク。 » 角田仁志

### 愛聴盤 CAPULLO / INFORMATICA ROMANTICA PARA AVANZADOS

海外の人からすると、神聖かまってちゃんはシューゲイザーなんだとか。これって双方にとってかなり新しい価値観の発見なのでは？なんて考える夏の終わりでした。» 長谷川梓

### 愛聴盤 TEENAGE FANCLUB / SHADOWS

僕がちょこっとマネジメントしているバンド、The Mammalsが只今リリース・ツアー真っ最中です。10月９日にツアー・ファイナルをやりますので是非！ » 八木橋一寛

### 愛聴盤 CHILLY GONZALES / IVORY TOWER

ボンジュール。最近パリづいてる私。パリ情報求む。こちらまで。https://twitter.com/Risaninjah » 渦尻りさ

### 愛聴盤 MATTHEW HERBERT / ONE CLUB

今回の『THE RAY』、いい感じでは？ はせせブンやこちぇらみつお、鈴木姐がフジで散々笑かしてくれたおかげかも。ありがとね♡次は朝霧行ってみようかな？ » 片岡 壮

### 愛聴盤 PHEW / ファイヴ・フィンガー・ディスカウント

閉店前日。かつての渋谷系の聖地にて非常階段を目撃。過剰な騒音に包まれる300人以上の普通の人達。ありえない日常、ありえない熱狂に音楽の力を確かに感じる。 » 久保正樹

### 愛聴盤 PETER AND THE WOLF / TRAFFIQUE'S ENDLESS WEEKEND MIXTAPE

「モンチコンのシュッとした方」です。なぜか突然『ローリングストーン日本版』のレビュー・ページを担当することになりました。ぜひぜひチェックしてみてください。» 清水祐也

### 愛聴盤 V.A. / SHANGAAN ELECTRO: NEW WAVE MUSIC FROM SOUTH AFRICA

HMV渋谷が閉店。色々考えさせられました。閉店間際の盛り上がりや報道の仕方に違和感が。イベントやった人達との想いが違う感じがして、何か悔しかった。» バーキャン豪朗

### 愛聴盤 CRAIG VEAR / SUMMERHOUSES

お初です。19年のシカゴ生活を終えて帰国しました。19年のギャップは意外に大きく、日々カルチャーショックと奮闘中です。しかしこれって帰国と呼べるのだろうか…。» 光野浩太郎

### 愛聴盤 NOODLES / EXPLORER

９月は半年に一度の忙しい月。忙しさを言い訳に最近音楽聴いてない、なんてことがない様がんばろうと。あ、ここに名前載るの初めてですね。よろしくお願いします。» 和気充郎

Follow us on
@YES_magazines

## STAFF WANTED!

イエス・マガジンズ編集部では原稿執筆、デザイン、通訳・翻訳、写真撮影、編集部のサポートスタッフなど、音楽出版業務全般でお力をお借りできるボランティア・スタッフを募集しています。応募の詳細についてはイエス・マガジンズ・ウェブサイト［www.yesmagazines.net］を参照ください。現状、謝礼等はご用意できませんが、音楽業界に興味のある方は奮ってご応募ください。プロ・アマ問わずお待ちしています！


THE RAY Vol.009

2010年10月5日　発行

掲載内容・広告等のお問い合わせはイエス・マガジンズ編集部までメールでお送りください。

有限会社 イエス・マガジンズ
〒114-0023 東京都北区滝野川1-82-6
MAIL : mail@yesmagazines.net

STAFF ： 片岡 壮　林 郁弥　長谷川梓

CONTRI-BUTORS ： 伊藤洋輔　上嶋祐美　渦尻りさ　大輪樹世子　かせねこリーヌ　金子厚武　久保正樹　佐藤一道　清水祐也　鈴木祐子　髙野広美　角田仁志　バーキャン豪朗　畠山 実　原口美穂　光野浩太郎　八木橋一寛　和気充郎

DESIGN ： BUN